ニューズレター　第 125 号・2023 年 8 月

日本カナダ学会　発行人：岸上伸啓　編集人：福士純・岡田健太郎・荒木隆人

事務局：〒 565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1 国立民族学博物館 岸上研究室気付
TEL:06-6878-8255 ・http://www.jacs.jp・ jacs@jacs.jp 郵便振替口座 00150－2－151600
（お問い合わせの受付：電話でのご対応は不定期となっておりますので、お問い合わせはメールにてお願い致します。）

第 48 回年次研究大会へのお誘い

河原 典史

今年の年次研究大会は、2023 年 9 月 16 日（土）・17 日（日）の 2 日間、大阪府吹田市の千里万博公園内にある国立民族学博物館にて開催されます。2017 年の第 42 回大会以来、同館での開催は 6 年ぶりになります。ようやくコロナ禍も収まりつつあるようですが、継続的な感染症対策、そして海外をはじめとする遠方からの参加も鑑み、昨年に続いてオンライン併用のハイブリッド形式で開催します。

第 1 日目の午前、シンポジウム I『カナダ北西海岸先住民の文化とアートー変化と現状－』から、大会の幕が開きます。ブリティッシュ・コロンビア大学の**ジェニファー・クラマー**氏による基調講演「宝物と所蔵物の過去、現在、未来－カナダ北西海岸先住民のアートー」のあと、2 本の発表が続きます。会場である「みんぱく」の伝統的な研究報告に、期待が高まります。なお、館内では企画展「カナダ北西海岸先住民のアートースクリーン版画の世界－」が開催されています（2023 年 9 月 7 日～ 12 月 12 日）。昼食休憩時にはユニークな作品、そして先住民社会と版画の変化との対応関係の展示をご覧ください。

午後には、シンポジウム II『カナダ日本人移民のパブリック・ヒストリー』が企画されています。地域に残された歴史的資料を保存するだけでなく、それを研究や教育、さらに「先祖探し」をはじめとするツーリズムにまで活用する事例の報告は、今後の移民研究の試金石になるかもしれません。

総会終了後の夕刻からは、館内のレストランで懇親会が開催される予定です。コロナ禍のなかでは、少なくない人数での飲食の場を提供することは困難でした。今年度は久しぶりに旧交を温め、研究の情報交換に花が咲くでしょう。

第 2 日目には、午前中に 3 本の自由報告があります。植民地主義政策、カナダ・ナショナリズムの思想性、そしてカナダモデルへの転換という興味深い報告が続きます。午後には、『観光』のセッションが置かれています。ガイドブックや先住民観光から考える諸問題、そして半世紀前

（次ページに続く）

JACS Newsletter No.125（August 2023）// **本号の内容**：第 48 回年次研究大会へのお誘い（河原典史）●**報告**：研究会「ポスト・マクルーハンのメディアとフェミニズム～カナダの文化研究を知る～」を開催して（宮澤淳一）●**研究紹介**：カナダの社会民主主義者としてのチャールズ・テイラー（高橋侑生）●**事務局より**（第 48 年次研究大会のお知らせ、「トラベル・グラント」募集について、『カナダ研究年報』第 44 号（2024 年 9 月発行予定）の公募要項、会費納入について（お願い））・・・・・・・●**編集後記**

の日本万国博覧会の報告は、まさに今年度の会場にふさわしい報告といえるでしょう。

2025 年には、再び大阪で万博博覧会が開催されます。ひと足先に、かつての会場であった千里万博公園でカナダ研究の交流はいかがですか。みなさまと対面、あるいはオンラインでお会することを楽しみにしております。（第 48 回年次研究大会企画委員長・立命館大学）

＊ ＊ ＊

＜報告＞研究会「ポスト・マクルーハンのメディアとフェミニズム～カナダの文化研究を知る～」を開催して

宮澤 淳一

本年 2023 年 4 月 8 日（土）の午後、青山学院大学（青山キャンパス・総研ビル大会議室）にて、研究会**「ポスト・マクルーハンのメディアとフェミニズム～カナダの文化研究を知る～」**が開催された。主催は青山学院大学総合文化政策学会。共催に同大学の革新技術と社会共創研究所とスクーンメーカー記念ジェンダー研究センターとの共催によるもので、日本カナダ学会の協力も得た。この企画を発案し、当日のモデレーターを務めた立場から、簡単に報告をしたい。

カナダはメディアの思想家マクルーハンを生んだ国であり、そのメディア論はカナダ流のカルチュラル・スタディーズの文脈で独自の「拡張」を遂げているが、日本での紹介は進んでいるとは言いがたい。今回は特にフェミニズムとテクノロジーの視座をそれぞれにもつ 2 名の先進的な研究者にその関心を語ってもらうことを主眼としたが、日本の気鋭の研究者 2 名によるレスポンスも加わり、刺激的な研究会となった。

最初のトークは、**サラ・シャーマ**氏（トロント大学）による**「メディアの再理解――マクルーハンのフェミニスト的拡張」**であった（Sarah Sharma, "Re-Understanding Media: Feminist Extensions of Marshall McLuhan"）。シャーマ氏はフェミニズム的な立場からメディア論を扱う研究者のひとりであり、2017 年から 2022 年まで、トロント大学のいわゆる「マクルーハン・センター」の所長を務めていた。トークはセンターを訪れるマクルーハン・ファンの多くが、彼女が所長であることを知って失望や違和感を表明したというエピソードから始まったが、思想は「白人男性」のものであるという既存の偏見に対する批判がこめられていた。実際、シャーマ氏は今回の演題と同じ題名の新著（R・シンとの共

研究会「ポスト・マクルーハンのメディアとフェミニズム～カナダの文化研究を知る～」会場の様子（2023 年 4 月 8 日）

著）をデューク大学出版局から昨年出版したばかりであり、その骨子の紹介が発表の内容であった。つまり、「メディアこそがメッセージである」に集約されるマクルーハンの思想自体を尊重するにせよ、そこに含まれる男性中心的な偏見を是正する試みである。たとえば、身体の「拡張」の例とされる事例が自動車や飛行機であって、哺乳瓶やベビーカーではないことへの異議申し立てである。

ディスカッサントとしてレスポンスを行なった**田中東子**氏（東京大学）は、この主張を支持し、最新のフェミニズム理論、批判的人種研究、クイア理論等の知見に基づき、男性中心主義的なメディア論の「救助」や「再生」を行なわなければならないことを強調した。巨大なメディア産業が牽引するメタバース等のメディア空間の構築の主体が相変わらず白人男性が主体である危機的な現状を指摘し、シャーマ氏の仕事の意義を裏づけた。フェミニズムの観点からメディア文化における女性の実践について調査と研究を進める田中氏ならではの見事なレスポンスであった。

2番目のトークは**ジェレミー・パッカー**氏（トロント大学）による「サーキットとサーキュレーション：フーコー、メディア理論、テクノロジカル・コントロール」だった（Jeremy Packer, "Circuits and Circulation: Foucault, Media Theory, and Technological Control"）。テクノロジーと権力の問題を中心に著作の多いパッカー氏は、新著『回路の牢獄』（*The Prison House of the Circuit*）で取り上げた話題から今回のトークを展開した。1890年の処刑用の電気椅子に始まり、2016年に死亡事故を起こした電気自動車の運転席にいたる4つの椅子の話を軸に、「回路」と「流通」の問題を取り上げ、技術的な制御の問題や、フーコーに由来する統治論や権力論が取り沙汰され、「回路の牢獄」の構図が浮かび上がった。

このトークを受けとめ、丁寧に論点を整理してくれたのは、ディスカッサントの**福田貴成**氏（東京都立大学）である。福田氏は表象文化論の研究者だが、特に専門の聴覚文化の立場から、音楽聴取のメディア（テクノロジー）の「回路」や「流通」の問題を引き合いに出した。ノイズキャンセリング機能のヘッドホンを用いてサブスクリプションサービスを享受する私たちは「オーディオ・システムの椅子」に座り、やはり「回路の牢獄」に囚われた存在ではないのか、と。実はパッカー氏の現在研究調査中の課題はオーディオに関わるものであった。しかし、福田氏に指摘されるまで、パッカー氏はここにも「回路の牢獄」があることに気づいていなかったそうで、この研究会でのディスカッションの成果に喜んでいた。

研究会の登壇者（写真左から、福田、シャーマ、田中、パッカー各氏）

逐次通訳を加えての3時間のセッションはあっという間に過ぎた。シャーマ氏とパッカー氏の来日に合わせた企画であったが、久しぶりの「対面」による研究会で、大阪や新潟など遠方からも聴衆が集い、意義深い研究会となった。関係者各位に感謝したい。

（青山学院大学）

＊

＜研究紹介＞カナダの社会民主主義者としてのチャールズ・テイラー

高橋 侑生

チャールズ・テイラー（1931-）はカナダ出身の哲学者である。彼は、西洋哲学史にかんする広範な知見を背景に、現代の様々な苦境に対する創造的な応答を模索してきた。その思考は領域横断的であり、多分野に影響を及ぼしている。国際的な評価も高く、彼の思想にかんする研究は世界各所で盛んに行われてきた。日本においても、主著である『自我の源泉』（原著 1989 年）や『世俗の時代』（原著 2007 年）などが翻訳されているほか、数多くの優れた研究が蓄積されている。

私の研究課題は、テイラーの「政治思想」を従来とは異なる視角から解明し、そのアクチュアリティを示すことである。テイラーが戦後の英米圏を代表する政治思想家の一人と言われて久しいが、私は依然として彼の政治思想の重要な側面が十分に検討・評価されていないと考えている。予め明確化しておくならば、従来の研究において看過されてきたのは「社会民主主義者」としてのテイラーの姿である。そして、本稿において強調したいのは、カナダ政治というコンテクストに彼の思考を位置づける思想史研究によってこそ、そうした姿を浮き彫りにすることができるということである。以下では、私のテイラー研究を簡潔に紹介し、それがカナダ研究にも寄与しうるものだということを示す。

テイラーは、しばしば、ジョン・ロールズ（1921-2002）を始めとするリベラルな政治哲学者に対抗した共同体主義者として特徴づけられる。その要諦は、彼独自の人間学にある。人間のアイデンティティ形成は、他者との対話を通じてなされるものであり、その意味で何らかの文化共同体との関係性を前提とする。また、18 世紀末以降、各人のアイデンティティの独自性が称揚されるようになったことで、共同体における／共同体に対する承認をいかに確保するかということが喫緊の問題となった。周知のとおり、影響力のある「承認の政治」論文（原著 1992 年）は、こうした人間学的な洞察を基礎として、個人的な諸権利を焦点化してきたリベラルな政治哲学を批判し、文化共同体に対する承認の契機を考慮する必要性を説くものであった。テイラーが、こうした見地から出身地カナダの憲法問題にかんして独自の立場を提示してきたことも良く知られている。彼が擁護するのは、連邦制の枠内で差異を承認する可能性、つまり、ケベック州に他州とは異なる特別な地位を認める非対称的な連邦制である。

テイラーの政治思想を理解するためには、次の問いに答える必要がある――彼はなぜ連邦制にこだわり、折衷的な立場を固守するのか。彼の共同体主義的な人間学を参照するだけでは、この問いに答えることはできない。というのも、カナダの連邦制をめぐる具体的な構想を、抽象度の高い人間学的洞察の唯一の帰結として正当化することは難しいからである。かくして必要となるのが、テイラーの思考をカナダ政治というコンテクストに位置づけ、彼の議論の政治的な意味を探る思想史研究である。

こうした研究関心のもと、私は、1960-70 年代カナダにおけるテイラーの政治的な立ち位置を検証し、彼がカナダの社会民主主義者として憲法問題に向き合っていたことを明らかにしてきた。テイラーは、1961 年にオックスフォード大学で博士号を取得した後、1976 年までマギル大学の教壇に立っていた。注目すべきは、この時期のテイラーが、1961 年に創設された社会民主主義政党 New Democratic Party（以下 NDP）を支える政治家としても活躍していたということである。彼は、執行部において同党の方針策定を主導し、4 度の連邦総選挙に出馬したほか、NDP のケベック州支部を確立するために奔走した。テイラーは、既存の二大政党制を打破し、階級間の緊張に根ざした政治

を実現することが必要だと考えたのである。カナダの政治・経済的エリートは、アメリカに本社をおく多国籍企業の権力に追従し、公正な経済発展や、より充実した社会保障の実現を阻んでいる。彼らに対抗するためにこそ、地域・文化横断的な左派連合を構築することが必要である。テイラーは、NDPの執行部において、あるいはケベック州の左派に対して、そう強く訴えていた。ここで重要なのは、こうした社会経済的な問題関心を背景として、憲法問題に対する彼の立場が定式化されていったということである。テイラーの構想において、カナダにおける二文化間の和解（そして、そのための非対称的な連邦制）は、第一に、経済的な対米独立を追求する行為主体を構築するための「条件」として、第二に、そうした左派的なカナダ・ナショナリズムを正当化するためのポジティブな「理念」として要求されていた。このように、カナダ政治におけるテイラーの立ち位置と問題関心を踏まえてこそ、連邦制をめぐる彼の折衷的な立場の政治性をより精確に理解することができる。

カナダの社会民主主義者としてのテイラーに着目することによって、彼の諸論攷を、生の諸領域がますます新自由主義的に再編されゆく現代的状況にレレバントなものとして読み解いていくことができる。確かに、地域・文化横断的な左派連合という彼の構想が実現した訳ではない――NDPが連邦政治の舞台で初めて公式野党の地位を得たのは2011年のことである（なお、当時の党代表ジャック・レイトンは彼の教え子である）。実際、1960年代末以降にテイラーが目の当たりにしたのは、ケベック州の左派運動が独立運動と深く交差し、自らの構想が潰えていく過程であった。だが重要なのは、テイラーが政治的に挫折した後も思考を続けたということである。彼は『ヘーゲル』（原著1975年）の執筆を通じて、健全な社会民主主義の「源泉」をめぐって思索を深めていく。したがって、この時期に精緻化され、『自我の源泉』に結実することとなるテイラーの人間学もまた、カナダの社会民主主義者としての彼の歩みを踏まえて読み直されねばならない。それは単に、アイデンティティ形成をめぐる共同体主義的な理解を提示するものではない。紙幅の都合上、詳細は割愛せざるを得ないが、彼の人間学が考究する問いの一つは、現代の政治的リアリティにおいて企業権力に対抗する制度や組織を構築していくことは可能なのか、そして、その可能性はどのように語りうるかということなのである。こうした点については、『世俗の時代』への展開も含めて、今後の研究において示す予定である。

最後に論及しておきたいのは、私のテイラー研究が、1960-70年代カナダにおける左派知識人の実践・思想をめぐるより広範な歴史研究へと展開されうるということである。同時期の左派知識人たちは、英語系／フランス語系カナダのいずれにおいても、文化／経済という問題領域の交点において左派であることの意味を問うていた。その点、テイラーを中心に据えることによって、そうした諸言説の系譜を再構築していくことができるだろう。こうした作業は、カナダ政治史・政治思想史研究への貢献となるだけでなく、グローバル化の進展を背景に多様な文化の共存が喫緊の課題となった世界において大いに意義があることだと思われる。

（京都大学）

＊ ＊ ＊

(((事務局より)))

◆第48年次研究大会のお知らせ

2023年9月16日（土）・17日（日）、国立民族学博物館およびZoomにて第48回年次研究大会が開催されます。プログラム・報告要旨集につきましては、学会HP内で発表致しますので、ご覧下さい。

◆「トラベル・グラント」募集について

2023年度（2023年4月1日～2024年3月

31 日）までの間に、カナダおよびカナダ以外の国（日本を除く）で開催される国際会議などでカナダ研究について報告をする本学会会員に旅費一部補助の制度です。本学会会員によるカナダ研究の成果を広く海外に発信し、研究の交流や国際化を図るのが目的です。ただし、トラベル・グラントは旅費の一部を補助するのが趣旨ですので、旅費のすべてをカバーするものではありません。募集要項は次のとおりです。**(1) 支給人数と支給金額**：1 名につき 5 万円・最大 2 名。**(2) 支給対象者**：募集時点において日本カナダ学会会員であること。原則として、専任の勤務先を持たない会員。専任の勤務先を持つ会員でも応募出来ますが、優先度は低くなります。**(3) 応募書類**：①本学会所定の応募用紙（日本カナダ学会のホームページに掲載）、②国際会議などでの報告が正式に受け入れられたという文書（メールも可）、③出張に関する費用（航空運賃、滞在費、参加登録料など）の見積書。**(4) 出張後の義務**：①帰国後 2 週間以内に報告した論文を、郵送にて学会事務局に提出すること。②出張に関わる費用の報告書（学会ホームページ掲載の所定の書式）。**(5) その他の事項**：①当該年度内でトラベル・グラントの予算額（10 万円）が満額執行されなかった場合でも、原則として、残額を次年度への繰越は行いません。②出張期間は当該年度内に終了しなければなりません。③このグラントを支給された会員は、原則として再度応募することはできません。**(6) 審査方法**：日本カナダ学会理事会における審査機関（対外交流・社会連携委員会）により事前審査を行い、それぞれ 5 月および 9 月の理事会にて最終決定します。**(7) 応募締切日**：2023 年 4 月末日および同年 8 月末日（年 2 回）。**(8) 送付先**：〒 565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1 国立民族学博物館 岸上研究室気付 日本カナダ学会事務局宛。**(9) 問い合わせ**：電子メールにて事務局まで。

◆『カナダ研究年報』第 44 号（2024 年 9 月発行予定）の公募要項

(1) 未発表の完全原稿のみ（採否の決定はレフリー制による）。**(2) 原稿の種類**：「論文」（邦文 40 字× 40 行× 12.5 枚相当以内；英仏文 16 語× 25 行× 20 枚相当以内）;「研究ノート」（邦文 40 字× 40 行× 8 枚相当以内；英仏文 16 語× 25 行× 12.5 枚相当以内）;「書評」（邦文 4500 ～ 5000 字）いずれも横書き、図表、注、文献リストを含む。**(3) 締切**：2024 年 1 月末日必着。**(4) 執筆要項及び投稿用表紙**：JACS ホームページに掲載 。**(5) 原稿送付先**：〒 277-8687 千葉県柏市光ヶ丘 2-1-1 麗澤大学 田中俊弘宛（郵送）、あわせて ttanaka@reitaku-u.ac.jp（メール添付）まで。

◆会費納入について（お願い）

現在会費の納入を受け付けております。また、前年度までの会費を未納の方は、直ちに納入下さい。過去 3 年分（当該年度を含まず）の会費が未納の場合、学会からの発送物停止等をもって会員資格を失うことになりますのでご注意下さい。**一般会員**：7,000 円・**学生会員**：3,000 円（学生会員は、当該年度の学生証のコピーを提出のこと）。郵便振替口座：00150-2-151600。**加入者名**：日本カナダ学会。他金融機関からの振込の場合は、口座番号：ゆうちょ銀行 〇一九（ｾﾞﾛｲﾁｷｭｳ）店 当座 0151600 ニホンカナダガツカイ。来年度以降、自動振替に移行希望の方は事務局までご連絡ください。必要書類をお送りします（自動振替による口座引落は 7 月です）。ご協力願います。なお会員区分の変更のある場合は直ちに事務局までお知らせ下さい。

＊ ＊ ＊

★編集後記・・・毎日酷暑といえる日々が続いていますが、カナダでは 6 月にはノヴァ・スコシア州で、7 月にはブリティッシュ・コロンビア州で大規模な山火事が発生しています。地球温暖化による高温や乾燥が山火事のリスクを高めると言われており、改めて地球温暖化への対策が人類にとって喫緊の課題であることを強く感じます。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(A)